

「薬学への期待」

タイトル：高齢化とヒトの幸せ

現東京理科大学基礎工学部に移った時、本奨励財団から「二次性能動輸送過程のエネルギー共役機構」という基礎的研究に対し研究助成を戴いた。提案した生体エネルギー変換機構の仮説を基に、今も継続研究しており、助成金はその土台作りに大変役だった。感謝している。

あれから20年「この頃の若者は・・・」と思うようになった。自分が老人になって頑固になった兆候かもしれない。公的人生からの引退の時期なのだろうか。が、「”心の欲するところから従えども、矩を超えず”の心境に到達しつつあるからで、実際若者は至らないところが多い」とも思いたい。

ところが「さて若者が問題なのか」と疑問がよぎる。人は自身を肯定したがるがため、他人を否定しがちである。歳を取ると、接する機会が多いのは部下や学生、つまり若者たちであり、だから若者一般を否定しがちなのもかもしれない、とも反省する。逆に、同年配や先輩は敬遠して接することが少ないだけなのだろう。そういう目で見渡せば、若者に限らず結構世の中（政治、経済、社会、教育、学問世界）に至る所目につくことが多い。「この頃の世の中は・・・」が正しい言い方であろうと悟る。

でもさらに、「この頃」だけなのかしら、と疑問が頭をもたげる。若い頃は経験も浅く、素直に世間（大人）の雰囲気に従順だったので、周りや世間の風潮を正しいものとして受け入れてしまっていたのではないか。歳相応に経験を重ね、世の中の矛盾を体験学習したお陰で、歳取ってから「この頃」がダメだと感じるのではなかろうか。つまりいつの時代でも、老人にとっては「この頃」がダメだと感じられるのだろうと推測できる。すると結局は「いつの世も世の中・・・」なのが一般則なのではないか、と思ひ至る。実はこのことは衆知の言い古されたことなのかもしれない。考えがここに至ってやっと、自分だけが肯定できる存在ということではなく、周りと同じように問題多き存在なのだということを知ることができるのだろう。結局人々は組織や社会に絡め取られてしまい、自分たち（ヒト）にとって問題の多い社会を作っているのだということなのかもしれない。

さて iPS 細胞、再生医療が騒がれている。世間では若返りの薬、長寿法などが話題になっている。薬学の出番であり、そういう医薬が待ち望まれている。でもひょっとすると、そんな長寿時代では、90歳代が今の私の年代（60歳）の人間をつかまえて、「この頃の若いのは・・・」とお説教することになるのかしらとふと心配になる。そんな元気を持つ老人は確実に増えるだろう。今の若者など子供扱いされかねない。60歳になっても叱られることになるのではと恐ろしい。これって世の中の進歩なの、はたまた退歩なの？ここまで来ると、私の頭では、堂々巡りしているようで結論が出そうにない。頭が固くなって、そんな世の中を想像できないのかもしれない。そして、この60歳の頭では、そんな世の中になるのなら、薬学になんか期待しない方がいい、と結論づけてしまいそうである。

こんな私、結局次を若者に任せるべき引退の潮時なのだろう。お後がよろしいようで・・・。ただ一言、薬学の中の一学問分野としても、生命倫理も含めて、どんな世の中になるのがヒトの幸せなのか、研究継続して頂きたいと願う。